

---

# テイルズオブエクシリア～使命と信念の領域交差～

バブル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア〜使命と信念の領域交差〜

### 【Nコード】

N2555Z

### 【作者名】

バブル

### 【あらすじ】

ある日ジュードがイル・ファンで倒れていた少年　カイラを助けると、なんと彼は記憶喪失で、謎の力を持っていた。

自分の謎の力を共にカイラは、ジュード達と旅をする中で、何を取り戻すのか

第1話 記憶喪失へ少年は目覚めの如く（前書き）

どうも、バブルです。

趣味でエクシリアの小説書いてみました。

あくまで趣味ですので、駄作です。それでもできる限り頑張りますのでよろしくお願いします。

## 第1話 記憶喪失へ少年は目覚めの如く

お互いの存在価値。

それを分かり合えないから、戦争が起こるのだろう。

それが彼らの唯一理想を主張する手段。

互いを認め合えない恐怖の圧迫感。

感情とは人間としての当然持つものだ。

感情は人間一人一人の個性や形を表すもので、同時に感情とは人間の敵でもあつて悲しみ、恐怖、憎しみを形づくり、時には人を殺し時には自分を滅ぼす、人間の体の中にある殺戮兵器でもあつた。

それは人間の日常に溶け込み、時には自分を変え、時には自分の存在さえ歪ませる上に、それにさえ気付かない。

だから戦争は悲しいのだ。

一人一人自分の理想だけに執着し、自分以外に存在する人間と理想を滅ぼす。

人間の認めれないものこそが恐怖を作り出し、人間は恐怖に壊すことを考える。

しかし、それは人間個人が滅ぼしたいものでもあると同時に、人間個人にとって新たな希望でもあるし、人生を生きる中での支えるものでもある。

だから互いに引けないのだ。それが戦争。

人間をそれを愚かだなんて微塵も思ったりしない。

自然の大地が、火の海。死体の山となろうとも武力は世界を包み、全てを戦争という誰も理解できない淵の絶望と自殺行為に、貶められていく。

空を突き抜けるように火柱が立ち、兵が持っている武器は、人間の血で染められ、そこ周辺の湖は赤黒い沼となっている。

これだけの酷い光景を目の当たりにしても、争いの闘争は止まることなく、光の速さで加速していく。

敵は殺しても殺しても増え続け、理想に追いついてもまた遠のき、また殺すため追いかけるため、人間の死体を踏み、人間の肉を踏む感触が慣れた足で、哀悼せず一步一步争いの連鎖という終わりなき戦争の戦場に向かっていくおぞましい輪廻。

この戦争に終わりは来るのだろうか。そもそも終わりなど存在するのだろうか。それどころか、この戦争は死体の山をさらに広めしう。

勝ちや負けすら存在しない。いずれ人類は絶望してしまう。後悔は先に立たない。

一生、輪廻の鎖というリンケージの空間に彼らは止まり、その空間

でしか彼らは生きられない。団結や平和などない。そんな言葉はとうの昔に棄てた。

そんな彼らの理想に意味は

あるのだろうか？

医者とは忙しいものだ。

患者の診察や検査の他、薬や精霊術などの準備。

時には休みの日に、重症患者が来る場合がある。

しかし面倒くさいとの一言で、止めれることではない。

医者とは人を救う仕事だ。それは、言い換えれば、人の命を預かっているとも言える。

それだけ重要な仕事だ。どんな怪我や病気でも、責任を持ってやり

終えなければいけない。勤しむ仕事ではなく勤しまなければならぬ  
い仕事なのだ。

そのタリム医学校では、外で倒れていた一人の少年が搬送されてい  
た。

その一室で……………

「……は？」

僕はまるで長い夢でも見ていたかのように、目を覚ました。

まだ…眠たいな。だけど、とりあえず状況を確認しないと。

僕の視界に入ってきたのは白い天井と、白と対照的な黒髪の少年だ。

こいつが僕を助けてくれた…のか？

「あ、目を覚ましたんですね」

僕が目を覚ましたのを見るなり少年は口を開いた。

言い方からして僕の思った通り、眠っている間、面倒を見てく  
れたのだろう。

僕は体をカクカクさせながら起きあがると、針で刺されたような妙な痛みが体を走ってるのが分かった。

背中は柔らかい感触だな…ベッドで眠っていたのか。

うまく動かない体を動かすと、僕は少年に話し掛ける。

「僕はどうしてたんだ？何でこんな所で眠ってたんだ」

「外で倒れていたんですよ。どうして倒れていたんですか？」

僕は質問されると首を傾げた。

えっと、倒れていたってことは僕の身に何かあったわけで、それが原因だろうけど、何があったんだっけ？

「……………」

あれ？どうしてだ。倒れてしまうほどの事だっただろうに、まったく何も思い出せない。

「やべ、思い出せない」

「えっ？」

思わず声に漏らしてしまうと、少年が反応した。

それよりどうする。

思い出せないなんて、かなりの重症じゃないか。

あっ、こいつに聞けば何か分かるかも。

「なあ、僕はどうして倒れてたんだ？」

「僕が見たのはあなたが倒れていた所だけですけど……もしかして覚えていないとか？」

うわあ、医者らしい勘だな。

正直に言っと……あんまり何も覚えていないんだよな。宛もないし、言っとくか。

「ああ、名前以外さっぱりだ」

「ええ！？それって記憶喪失なんじゃ！！」

少年は目を見開いて驚いた。

まあ、仕方ないよな。本当のことだし、あまり黙っておくのはよくなさそうだし。

少年がしばらく黙って考え込むと、僕の方を見てまた口を開き始め

た。

「一応名前を聞いておきましょうか。僕はジュード。ジュード・マ  
ティス」

そっか、そういえば挨拶してなかったけ。

ジュードが言い終わると、今度は続けて僕が自己紹介をした。

「僕はカイラ。カイラって呼んでくれ」

年近いみたいだし敬語は不要なと付け加えれると、ジュードは頷い  
た。

「うん、所でカイラ。君は多分記憶喪失だと思うよ」

「記憶喪失……」

「うん、きつと倒れる前の何かがきつかけで記憶を失ったんだと思  
うんだ」

記憶喪失……か。

それなら確かに記憶が無いのも説明いくよな。  
ジュードも断言したわけではないと思うけど、可能性的には高いと  
思う。

でも記憶が無いのは確かだし……どうしようか。記憶が無いなら、あんまり動けねえし。

悩んでるのが顔に出てきたのか、ジュードがそれに気付き、指をこめかみに当てジュードも悩み始めた。

「うーん、そうだ。もしカイラで良かったら、街と一緒に周って見ない。倒れていたのもこの街イル・ファンだし、もしかしたら何か思い出せるかもしれないよ」

イル・ファンって言う街なんだなここは。

街の名前を聞いたのは初めて……もしかしたら記憶が無いだけかもしれないが、そうした方が良いよな。

僕は頷くと、ジュードは「少し待ってて」と言ったあと、更衣室に入ってしまったら、服を着替えて戻ってきた。

「じゃあ、僕もちょっと用事があるから、一緒に行こうか」

「恩に着るよ、ジュード。記憶が曖昧で迷惑掛けるかもしれないけど、そこも含めてよろしくな」

僕はそう言っつて、なんとか痛みが引いた体でベッドから立ち上がると、ジュードに案内されて、病室を後にした。



第1話 記憶喪失へ少年は目覚めの如く (後書き)

感想など待っておりまーす (^ - ^ )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2555z/>

---

テイルズオブエクシリア～使命と信念の領域交差～

2011年12月9日00時52分発行